大阪労働学校 2023 年度後期　ものの見方・考え方講座　斉藤日出治

テーマ　連帯の生態系を創造する―21 世紀コミュニズム像の探究

第 1 回　スペインの協同組合の生態系とは何か

一　グローバル資本主義の危機と協同組合運動の高揚―その深層に胎動するもの

二　協同組合の生態系の諸特徴

第 2 回　生態系の思想

一　精神の生態系―グレゴリー・ベイトソン

二　3 つのエコロジー―フェリックス・ガタリ

第 2 回　生態系の思想

一　生態系の地平の出現

以上のように、スペインの協同組合を、資本主義とは異なるひとつの生態系を組織する運動という視点から特徴づけてみると、資本主義のオルタナティヴとしての性格が鮮明に浮かび上がってくる。協同組合運動が組織しつつある社会的連帯経済と危機に瀕しているグローバル資本主義経済との対抗関係が、生態系次元での組織化をめぐる対抗運動であることが見えてくる。

資本主義の変革は、これまで経済と政治、市民社会と国家の組織化のありかたの変革をめぐって展開されてきた。だが、こんにち求められているのは、経済と政治、市民社会と国家の組織化が生態系の組織化とどのようにかかわるのか、生態系の組織化をいかに変革するのかという視座からの展望を開くことである。

したがって、本章では、生態系という次元がいかなる問題系を浮かび上がらせるのかを問い、それを踏まえて、次章では、近代市民社会のありようを生態系の視点から問い直す素描をしてみたい。

二　生命過程のつながりの探究―「精神の生態系」（グレゴリー・ベイトソン）

生態系の次元に立つためには、人間と自然、社会と自然、文化と自然を裁断する思考から脱する必要がある。つまり、自然を人間・社会・文化にとって所与のものとみなし、後者(人間・社会・文化)が前者(自然)の制約から脱していく過程として歴史をとらえる、そのような思考からみずからを解き放つ必要がある。

人間・社会・文化とは、それ自身が自然であり、自然が生きるすがたである。むしろ、人間も、社会も、文化も、歴史とともに自然と深くかかわり、自然を深く生きるようになる(人間は自然の一部であるだけでなく、自然を生きる存在なのだ)。文化と自然の関係について、D・ハーヴェイ[2009]はそう語る。

「「文化」と「自然」の境界線は透過的なものであって、時間とともにますますそうなっていく。自然と社会とは、別個の対立する領域なのではなく、より総体性の動的統一の内部にある内的な諸関係なのである」(ibid.,邦訳四一四頁)。

したがって「自然と社会は、広大な社会生態学的総体性のダイナミズムのうちにある内的な諸関係」(ibid.,邦訳四一六頁)として認識されねばならない。

社会を生態学的次元から問い直すというのは、この意味においてである。この視座から学的知のありかたを刷新して、〈精神の生態学〉の地平を拓いたのがグレゴリー・ベイトソンである。

ベイトソンは、人間を自然や他の生命活動から切り離し、人間固有の知を探究してきたそれまでの知的実践を批判して、あらゆる生命活動に共通する知のありかたを探究しようとする。つまりすべての動植物の生命活動や森林や河川の動きから人間が組織する様々な諸団体の活動にいたるまでの営みに共通する生態学的行動をモデル化しようとする。

「人間固有の知ではなく、より広大な知、ヒトデもイソギンチャクも大木の森林も人間の団体組織もみんな知っている共通分母としての知について考察」(Bateson G.[1979]邦訳一七頁)するのが、〈精神の生態学〉の課題である。そこには、「生物進化と人間集団とを同時に特徴づける単一の知のプロセスが存在する」(ibid.,邦訳一七頁)、という認識が伏在している。

この共通の知をたどるとき、人間に固有なものとみなされたもっとも崇高で優雅なものを他の生命体の生命活動がすべて備えていることが明らかになる。だから、逆説的なことに、人間の崇高さは「動物的」であることなのだ、とベイトソンは言い切る。

生命世界全体の生命活動を特徴づける知のプロセス、それはあらゆるものが相互につながりあっている、ということである。生きた世界では「精神的で、・・相互のつながりが卓越している」。「世界はあまねく満たす美に包まれてみんな結ばれ合っている」(ibid.,邦訳四三頁)。

人間もふくめた哺乳動物の思考や行動は、たがいの関係のありかたによって規定される。「われわれはみな、関係のパターンに心を砕く動物である」(Bateson G.[1972]邦訳、下、二六三頁)。この関係のパターンがいかに形成され、定着し、そして別のパターンにいかにして変わるのか、ベイトソンはその考察を〈精神の生態学〉の課題としている。

ベイトソンはこのつながりのありようの究明を課題とする研究に着手する。あらゆる生命体に共通するこの「つながり合うパターン」、「結び合わせるパターン」([1979]邦訳二三頁)の考察に専念する。「生きとし生けるものすべてを結び合わせるパターン」(ibid.,邦訳二四頁)への問いによって、人間と自然、人間と生物の領域区分を横断する知の地平、つまり〈精神の生態学〉の地平がたちあらわれてくる。

したがってベイトソンの生態系とは、ひとの内面的な心理や集団的心理、文化や精神活動を切り捨てた客観的な物質代謝の過程ではない。そのすべてを包摂してあらゆる生命体のたがいにつながる運動のダイナミズムを考察しようとすることが〈精神の生態学〉の地平を開示する。

この〈精神の生態学〉の視座から近代世界をとらえると、近代世界はそのようなつながりを喪失した世界であるかにみえる。ベイトソンは、トーテミズムの世界では、人間と動物と

のあいだにつながりを見ていたが、近代人はそのようなトーテム世界のつながりの感覚を失い、たがいに分断され孤立している、と言う。

だが、近代世界は人間相互のつながりや人と自然のつながりを分断しながら、同時にひととひととの、ひとと自然との、物象的で抽象的なつながりを生産することによって抽象的にして普遍的で、特殊なグローバル世界を創出した。その意味で、近代世界をもひとつの特殊な〈精神の生態系〉として考察することは可能であるし、近代世界をそのような特殊な〈精神の生態系〉として認識することがオルタナティヴな〈精神の生態系〉を発見し創造することにつながる。その意味で、ベイトソンの思考は、資本主義あるいは市民社会として語られてきた経済・社会のありようを〈精神の生態系〉という視座から再考することをわれわれに迫る。

三　自然・社会・精神の生態系―「三つのエコロジー」(フェリックス・ガタリ)

ベイトソンと同じく、人間・社会・文化・自然といった領域を区分して思考する既存の知の世界から脱して、領域横断的な知として生態学を措定したのがフェリックス・ガタリの『三つのエコロジー』である。

ガタリにとって、生態系＝エコロジーとは、人間と自然の物質代謝過程であるだけでなく、この物質代謝過程を媒介する社会的諸関係や集団的主観性をもふくみこんだ概念である。ガタリは、特定の領域に封じ込められた資本主義的主観性を領域横断的な主観性の生産によって突破するための概念として生態系＝エコロジーの概念を援用する。労働運動やフェミニズムや反精神分析や子どもの権利といった異質で多様な社会闘争が「相互に認めあい、やりとりし、相談し、全体で豊かになる方向に向かう」『(Genosko G.[2009]邦訳九三頁)ことをとおして新しい主観性の生産をめざすプロセスこそ、ガタリが設定する生態系＝エコロジーの地平にほかならない[7]。

ガタリは、現代世界の危機を、科学技術による生態系の破壊がもたらす自然環境の危機と、親密な生活圏(家族・近隣)および市民社会における社会的きずなの衰弱による社会環境の危機という二重の層においてとらえ、その二重の危機を〈エコロジーの危機〉ととらえる。そしてこの生態学的危機を認識するための三つのエコロジーの次元を設定する。

自然と人間の物質代謝過程としての自然のエコロジー、社会諸関係やひとびとの行動様式を組織する社会のエコロジー、そして、ひとびとのこころのありようやものの見方を組織する精神のエコロジー、がそれである。そして、この三つのエコロジーの領域が相互横断的に作用しつつ、資本主義的な主観性を超える新しい集団的主観性を産み出す変革をめざす。人間だけでなくすべての生命体を配慮し、他者を尊重し、責任と連帯の感覚を養う精神の生態系がこの三つのエコロジーの相互作用の過程から生み出されてくる。

「三つのエコロジーはひとつの集合体であって、さまざまな領域が互いにどう作用しあうのかを示すものである・・三つのエコロジーというレンズをつければ、ひとつの潜在的力が見えてくる」、つまりそのつながりが「感じられるようになる」(Genosko G.邦訳一二〇

頁)。

にもかかわらず、この三つのエコロジーの領域は、現存の近代市民社会の枠組みの制約下で了解されるために、その「潜在力」、「つながり」を感じとることが妨げられてきた。私的な諸個人がたがいに独立した人格として市場で自由で平等な交通をおこなう市民社会においては、生態系はこの交通形態(つまり市場取引)によって媒介されるがゆえに、市場取引のたんなる外部性として受け止められる。あるいは、市場取引を外部で支える共通資本(外部経済)のようにして受け止められ、そのようなものとして処理される。

だが、この三領域の横断的相互作用のなかでエコロジーの危機を感じとるとき、自然の生態系も、精神の主観性も、社会の諸制度も、ともに同じ生態系の運動の過程としてたち現れてくる。そのような領域横断的な生態系のありようをガタリは「生態‐哲学 eco-sophie」と呼ぶ。

そうすると、われわれは市民的交通形態をこの生態‐哲学という市民社会の深層に位置する次元の運動形態として位置づけなおすことが求められる。つまり、資本主義あるいは市民社会という近代の社会システムが生態‐哲学次元を組織する固有のシステムとして再定位される。資本主義は、資本・賃労働の階級関係という一元的な社会関係を組織するだけでなく、生態‐哲学次元が線引きする複合的な諸線にしたがって多元的な諸関係の複合的なつながりにおいて定位しなおす必要に迫られる。

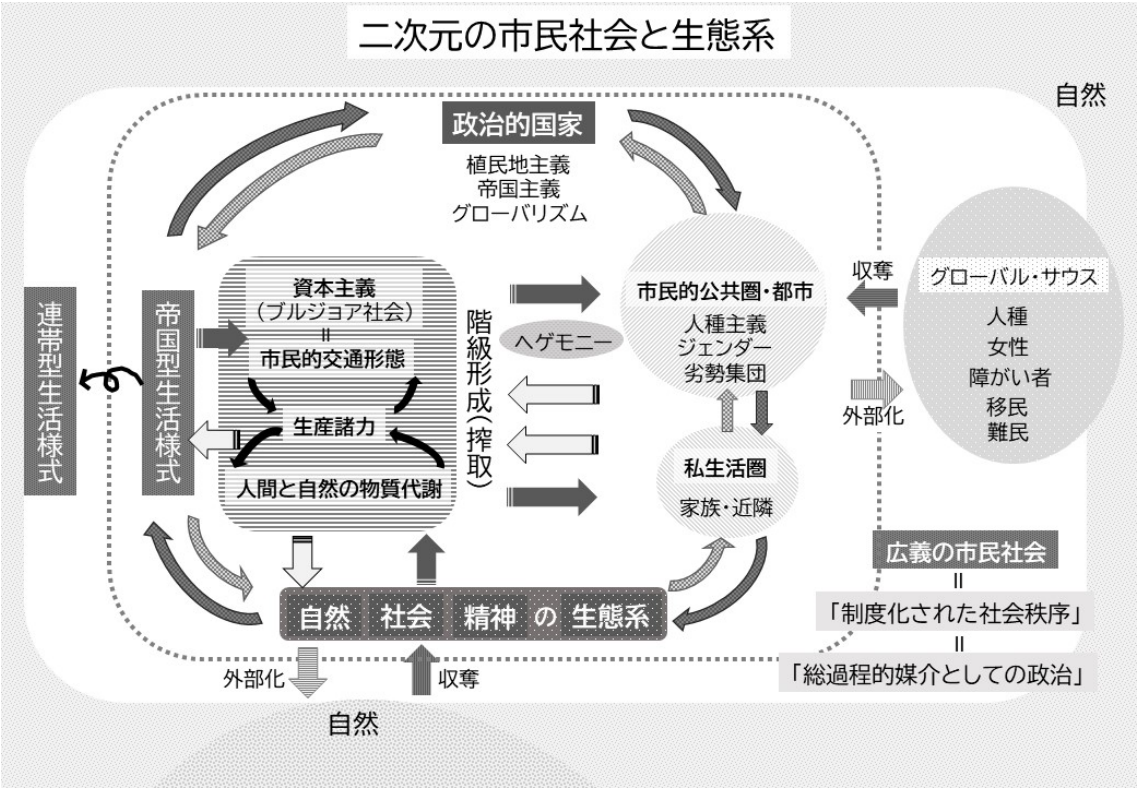
「エコゾフィー[生態‐哲学—引用者]的参照基準が多様きわまりない領域における人間の実践の再構成の諸線を指し示す」(Guattali F.[1989]邦訳一八頁)のだ。都市計画、スポーツ、芸術といったあらゆる領域がこの諸線に沿って再定位され、生態‐哲学的次元における可能性の諸実践を提示するようになる。生態系の次元から人間の存在のしかたがとらえ返され、その新たな可能性をひとびとの意識の俎上に浮かび上がらせる。家族・恋人・近隣の人間関係、都市の計画、都市交通のあり方、芸術的実践のありかたが、この座標軸から問い返される。

資本主義の権力やその権力がつくり出す集団的主観性が、生態系を組織する様式として再定義されるようになる。資本主義の産み出す主観性は、「人種や民族、職業的身体、スポーツ競技、威圧的男らしさ、マスメディアのスターなどと結びついた膨大な主観性の集合体」(Guattali F[1989]四三頁)として組織されている。このような「膨大な主観性の集合体」のありかたを生態‐哲学の次元から問い直し、そのありかたを転換する道筋を開示することが求められる。この問い直しは、この世界を生きるものにとって自明であるかに見える空間・時間・身体のありようを生態‐哲学の視座から再審に付す。そして、空間・時間・身体のありようの資本主義的な組織化の批判的な自己認識を通して、人間と自然の物質代謝過程を生きる集団的主観性のありよう、社会的実践や制度のありようの転換を迫る[8]。

四　二つの市民社会と生態系

１　ブルジョア社会と＜人間と自然の物質代謝＞

２　＜広義の市民社会＞と三つの生態系＝エコロジー



参考文献

岸本聡子[2020]『水道、再び公営化！欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』集英社

[2021]「ミュニシパリズム(地域自治主義)がひらく世界―公共と自治を取り戻す」アジア太平洋資料センター『コロナ危機と未来の選択』コモンズ

工藤律子[2016]『雇用なしで生きる―スペイン発「もうひとつの生き方」への挑戦』岩波新書

[2020]『つながりの経済を創る―スペイン発「もうひとつの世界」への道』岩波書店

[2023]「スペイン「労働者協同組合」の最前線」『世界』4 月号

Bateson G.[1972]Steps to an Ecology of Mind,Chandler Publishing Company.[佐藤良明訳『精神の生態学へ』上・中・下、岩波文庫]

[1979]Mind and Nsture-A Neccesity Unity,Dutton,1979[佐藤良明訳『精神と自然―生きた世界の認識論』岩波文庫]

Genosko G.[2009] Felix Guattari,A Critical Introduction,Gary Genosko,Pluto Press[杉村昌昭・松田正貴訳『フェリックス・ガタリ』法政大学出版局]

Guattari F. [1977]La revolution moleculaire,Editions Recherches,[杉村昌昭訳『精神と記号』法政大学出版局]

[1989]Les trois ecologies,Editions Galilee[杉村昌昭訳『３つのエコロジー』平凡社]

[2011]Lignes de fuite : pour un autre monde de possibles, Éditions de l'Aube[杉本昌昭訳『人はなぜ記号の従属するのか』青土社

Harvey D,[2009]Cosmopolitanism and Geography of Freedom,The Colombia University Press.[大屋定晴ほか訳『コスモポリタニズム―自由と変革の地理学』作品社]

Hirshman A.[2008] Getting ahead collectively ［矢野修一ほか訳『連帯経済の可能性―ラテン・アメリカにおける草の根の経験』法政大学出版局

Get ahead 進歩する、前に進む、成功する、追い越す、出世する　→←　競争する